

(本発表のお問い合わせ先)
美術館美術課
広報資料取扱主任: 牧野裕二
電話 823-1711

**【市長定例記者会見】「令和5年度国立美術館巡回展 20世紀美術の冒険者たち
—名作でたどる日本と西洋のアート」を開催します**

- ・展覧会名: 令和5年度国立美術館巡回展 20世紀美術の冒険者たち —名作でたどる日本と西洋のアート
- ・会期 : 2023(令和5)年9月30日(土)~11月19日(日)
- ・主催 : 高松市美術館 東京国立近代美術館
- ・共催 : 四国新聞社
- ・協力 : 熊本県立美術館
- ・会場 : 高松市美術館2階展示室
- ・休館日: 月曜日(10月9日(月・祝)は開館、10月10日(火)は休館)
- ・開館時間: 9時30分~ 17時(但し金曜日、土曜日は19時閉館/入室は閉館30分前まで)
- ・入場料: 【一般】1,200円(960円)、【大学生】600円(480円)、
【高校生以下】無料

※()内は前売、20名以上の団体料金

※身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳所持者は入場無料

詳細は別添の開催要項をご参照ください。

○お問い合わせ

高松市美術館 〒760-0027 香川県高松市紺屋町10-4 Tel:087-823-1711

■添付資料:

・開催要項



左から
岸田劉生《麗子肖像(麗子五歳之像)》1918年
パウル・クレー《花ひらく木をめぐる抽象》1925年
古賀春江《海》1929年
いずれも東京国立近代美術館蔵

高松市美術館開館35周年記念 令和5年度国立美術館巡回展 20世紀美術の冒険者たち—名作でたどる日本と西洋のアート—

会期 2023(令和5)年9月30日(土)~11月19日(日)

会場 高松市美術館(香川県)

2023 会期

9.30-11.19

【土】
【日】

月曜日休館
10/9(月・祝)は開館
10/10(火)は休館

開館時間
9:30-17:00
金・土は19:00閉館
入場は開館30分前まで

主催：高松市美術館
東京国立近代美術館
共催：四国新聞社
協力：熊本県立美術館





観覧料 一般 ¥1,200(¥960)
大学生 ¥400(¥480)
高校生以下無料

※()内は前売、20名以上の団体料金
※身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳所持の方は入場無料
※販売等は、高松市美術館1階受付、高松市役所生協、ゆめタウン高松サービスカウンター、宝飾書店本店および南本店にて9/20(金)まで販売
(詳細な販売開始時期は各店舗へお問い合わせください)

T.A.M.
高松市美術館
TAKAMATSU ART MUSEUM

20世紀
Adventures of Art
in 20th century
—appreciating Japanese and
Western artworks through Masterpieces—

—名作でたどる
日本と西洋のアート—

**美術の
冒険者たち**

高松市美術館開館35周年記念
令和5年度国立美術館巡回展



本プレスリリースについてのお問合せ先

高松市美術館 Tel: 087-823-1711、087-823-1730 〒760-0027 香川県高松市紺屋町10-4

展覧会担当：牧野裕二 yuji_6348@city.takamatsu.lg.jp

高見翔子 shoko_11801@city.takamatsu.lg.jp

広報担当：福田千恵 a160159@city.takamatsu.lg.jp

□企画概要

展覧会名 高松市美術館開館35周年記念 令和5年度国立美術館巡回展
20世紀美術の冒険者たち—名作でたどる日本と西洋のアート

(英文タイトル) Touring Exhibition of National Museum of Art in FY2023
Adventures of Art in 20th century
:appreciating Japanese and Western artworks through Masterpieces

主催 高松市美術館 東京国立近代美術館

共催 四国新聞社

協力 熊本県立美術館

会場 高松市美術館2階展示室

会期 2023(令和5)年9月30日(土)～11月19日(日)

休館日 月曜日(10月9日(月・祝)は開館、10月10日(火)は休館)

開館時間 9:30～17:00(金・土曜日は19:00閉館／入室は閉館30分前まで)

観覧料 一般1,200円(960円)、大学生600円(480円)、高校生以下無料

※()内は前売、20名以上の団体料金

※身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳所持者は入場無料

※前売券は、高松市美術館1階受付、高松市役所生協、ゆめタウン高松サービスカウンター、宮脇書店本店及び南本店にて9月29日(金)まで販売(詳細な販売開始時期は各店舗へお問い合わせください。)

展覧会概要 1952年の開館以来、日本の美術界をリードし続ける東京国立近代美術館。本展では20世紀の日本・西洋美術の軌跡を、同館所蔵の洋画・彫刻コレクションによりたどります。明治以降の日本では、近代化と西洋化による社会の変動とともに、新たな美術表現が開拓されてきました。本展では、美術の普及期である明治時代、個に根ざした表現が重視されてきた大正時代、自由と抑圧がせめぎ合う昭和戦前期、表現の多様性が増す戦後の動向までを概観します。あわせて、日本近代美術の展開を語るうえで欠かせない、西洋のモダンアートもご紹介します。近代美術から現代アートへの道のりは、既存の様式を疑い、未知の表現へ踏み出そうとする試みの連続でした。その変貌の軌跡は「冒険」にもなぞらえられるでしょう。高松市美術館と巡回先の熊本県立美術館の所蔵品をまじえた78点の作品による、近代美術から現代アートにいたる冒険の旅をご覧ください。

□みどころ

目まぐるしく展開した20世紀美術の「冒険」によろこそ！

西洋から「美術」の概念がもたらされ、展覧会や美術学校などの制度が整えられた明治、個に根差したモダニズムが開花した大正、抑圧の中で前衛表現が追求された戦前の昭和、新たな発想や従来にない素材を用いた作品が生まれた戦後の昭和・・・20世紀の美術はそれぞれの時代の出来事と呼応しながら、目まぐるしく展開しました。今回の展覧会では、そうした美術の変貌の軌跡を「冒険」になぞらえ、「20世紀美術の冒険者たち」というタイトルを冠しました。東京国立近代美術館のコレクションを中心に、巡回館である熊本県立美術館と高松市美術館のコレクションも加え、20世紀のアーティストたちによる冒険の軌跡をお楽しみください。

(章構成と出品作家) * 出品作家は展示予定順

・プロローグ 20世紀の序章

黒田清輝／中沢弘光／南薫造

・第1章 描写から表現へ—1910-20年代

梅原龍三郎／藤島武二／萬鉄五郎／川上涼花／中村彝／岸田劉生／荻原守衛／藤川勇造／神原泰／
村山知義／岡本唐貴／仲田定之助／東郷青児／古賀春江／川口軌外／里見勝蔵／佐伯祐三／藤田嗣治

・第2章 「憧れ」の西洋美術

オーギュスト・ロダン／ピエール＝オーギュスト・ルノワール／アンリ・ルソー／
モーリス・ド・ヴラマンク／ホアン・グリス／アンドレ・ロート／アンリ・マティス／
パウル・クレー／イヴ・タンギー／ワシリー・カンディンスキー／クルト・シュヴィッターズ／
パブロ・ピカソ／マルク・シャガール

・第3章 社会と美術—1930-40年代

清水登之／石垣栄太郎／野田英夫／津田青楓／福沢一郎／三岸好太郎／北脇昇／大塚耕二／
浅原清隆／山口長男／村井正誠／斎藤義重／小磯良平／巖光／猪熊弦一郎／桂ゆき(ユキ子)／
藤田嗣治／松本竣介

・第4章 拡大する表現—1950-60年代

木村忠太／北脇昇／岡本太郎／浜田知明／香月泰男／河原温／池田龍雄／山下菊二／曹良奎／
山口勝弘／北代省三／白髪一雄／田中敦子／荒川修作／中西夏之／工藤哲巳／菊畑茂久馬／
三木富雄／高松次郎

まさに美術の教科書！「名作」がいっぱい

東京国立近代美術館は1952年に開館して以来、近代以降のすぐれた美術作品の収集に努めてきました。開館当初の収集方針には「物故作家の作品のうち歴史にのこる名作」という項目がありますが、現在収蔵されている約13,000点のコレクションの中には、まさに教科書に掲載されるような「名作」が数多く存在します。油絵としては最初に描かれた「麗子像」である岸田劉生《麗子肖像(麗子五歳之像)》、モダンガールや潜水艦など近代文明の象徴が散りばめられた古賀春江《海》など、今回の展覧会においても同美術館が誇る「名作」の数々が並びます。



岸田劉生
《麗子肖像(麗子五歳之像)》
1918年 東京国立近代美術館蔵



古賀春江《海》1929年
東京国立近代美術館蔵

多彩なイベント

講演会、記念パフォーマンス、東京国立近代美術館スタッフによる対話鑑賞プログラム、学芸員やボランティアによるギャラリートーク、聴覚や視覚に障がいをもつ方たちと健常者が一緒に作品鑑賞をするワークショップ、ミニコンサートなど、展覧会をさらに楽しむことのできる多彩なイベントを開催します。

□関連イベント

記念講演会「あなたは誰？描かれた「モデル」から読み解く近現代美術」

9月30日(土) 13:30～15:00(13:15開場)

講師：佐原しおり(東京国立近代美術館研究員)

会場：1階講堂

申込不要／定員100名／無料／SNSライブ配信予定

記念パフォーマンス

11月19日(日)

演奏：野村誠(音楽家)

内容：展示室にて、作品からのインスピレーションを基に鍵盤ハーモニカ等により即興演奏をします。

①11:00(60分程度)

会場：高松市塩江美術館

申込不要／要観覧券

②17:00(60分程度)

会場：高松市美術館2階展示室

要申込／定員抽選30名／要観覧券

お申込み方法：9月16日8:30～10月13日24:00に当館ホームページ内申込フォームよりお申してください。

東京国立近代美術館の対話鑑賞プログラム

■ ギャラリートーク

11月8日(水) ①10:00～10:50 ②13:30～14:20

進行役：細谷美宇(東京国立近代美術館研究員)

内容：対話しながら数点の作品を鑑賞します。

会場：2階展示室

要申込／定員各回先着10名／要観覧券

お申込み方法：10月3日8:30～電話(高松市美術館087-823-1711)にてお申してください。

■ オンライン鑑賞会

11月11日(土) 11:00～11:45

進行役：東京国立近代美術館ガイドスタッフ

内容：オンライン(Zoomミーティング)により対話しながら1点の作品を鑑賞します。

要申込／定員先着12名／無料

お申込み方法：9月16日8:30～10月27日24:00に当館ホームページ内申込フォームよりお申込みください。

本プレスリリースについてのお問合せ先

高松市美術館 Tel: 087-823-1711、087-823-1730 〒760-0027 香川県高松市紺屋町10-4

展覧会担当：牧野裕二 yuji_6348@city.takamatsu.lg.jp

高見翔子 shoko_11801@city.takamatsu.lg.jp

広報担当：福田千恵 a160159@city.takamatsu.lg.jp

□関連イベント

ギャラリートーク

■ 学芸員 10月1日(日)14:00～

■ ボランティアcivi 会期中の日曜日(ただし10月1日を除く)各14:00～

■ ボランティアciviによるおしゃべり鑑賞会 10月9日(月・祝)、11月3日(金・祝)各14:00～

会場：いずれも2階展示室

申込不要／要観覧券

ワークショップ「かく・みる冒険 筆談鑑賞」

10月14日(土)①10:30～12:00、②13:30～15:00 ※手話通訳あり

進行役：小笠原新也(耳の聞こえない鑑賞案内人)

内容：聞こえる人と聞こえない(聞こえにくい)人に、筆談による対話を通して、展示作品の鑑賞をしていただきます。

対象：小学生以上。どなたでも(聞こえない人、聞こえにくい人など)

会場：1階講堂、2階展示室

要申込／定員各回先着10名程度／要観覧券

お申込み方法：9月16日8:30～10月12日24:00に当館ホームページ内申込フォームよりお申込みください。

ワークショップ「みるって何だろう？—見えない・見えにくい人と共に行う美術鑑賞会」

10月15日(日)10:00～12:00

進行役：朝倉成樹(香川県立視覚支援学校教員)

アドバイザー：日野陽子(京都教育大学美術科准教授)

協力：香川県立視覚支援学校

内容：見える人と見えない(見えにくい)人に、対話を通して、展示作品の鑑賞をしていただきます。

対象：中学生以上。どなたでも(見えない人、見えにくい人など)

会場：1階講堂、2階展示室

要申込／定員先着15名程度／要観覧券

お申込み方法：9月16日8:30～10月12日24:00に電話(高松市美術館087-823-1711)または当館ホームページ内申込フォームよりお申込みください。

エントランス・ミニコンサート「Les vents de la musique moderne(近代音楽の風)」

10月7日(土)14:00～14:30

出演：見垣祐介(ファゴット)、長岡佐和・小林遼香(ピアノ)、三好結愛(フルート)、青山夕夏(監修／フルート)

会場：1階エントランスホール

申込不要／無料

協力：香川大学

本プレスリリースについてのお問合せ先

高松市美術館 Tel:087-823-1711、087-823-1730 〒760-0027 香川県高松市紺屋町10-4

展覧会担当：牧野裕二 yuji_6348@city.takamatsu.lg.jp

高見翔子 shoko_11801@city.takamatsu.lg.jp

広報担当：福田千恵 a160159@city.takamatsu.lg.jp

□ **主な出品作品** (広報画像をご希望の方は広報担当に番号をお知らせください)

①

黒田清輝《落葉》1891年 油彩・キャンバス 東京国立近代美術館蔵



黒田清輝(1866～1924)は鹿児島市に生まれる。1884年(明治17)フランスに留学し、サロンの大家ラファエル・コランから、印象派の明るい光の描写を採り入れた外光派の表現を学ぶ。帰国後の96年、洋風美術団体・白馬会を結成。同年から新設の東京美術学校(現・東京藝術大学)西洋画科の教育を任せられ、日本のアカデミズムを築いた。文部省美術展覧会(文展)の開設に貢献するなど、後半生は美術行政の中心人物としても美術振興に尽くした。

本作は留学中、フォンテーヌブローの森の南にある小村グレー=シュル=ロワンで制作されたもの。黄葉した葉を一面に落とすポプラの木立を、スピード感のある短いタッチを重ねて描く。影には紫が用いられ、画面が暗くなるのを防いでいる。印象派に通じる表現方法によって、さわやかな秋の景色を描き出している。

②

藤島武二《匂い》1915年 油彩・キャンバス 東京国立近代美術館蔵

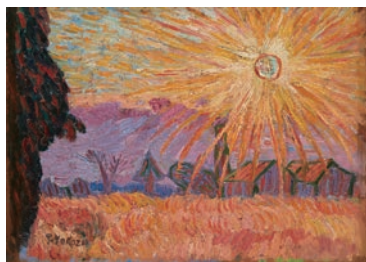


藤島武二(1867～1943)は鹿児島市に生まれる。川端玉章から日本画を、曾山幸彦らから洋画を学んだ。1896年(明治29)に東京美術学校西洋画科の助教授に就任。明治30年代には絵画における明治浪漫主義を率いた。1905～10年にフランス、イタリアに留学。帰国後は日本の風土に基づく油彩画を追求し、東京美術学校で多くの後進を指導した。

留学中に絵画の新潮流を目のあたりにした藤島は、帰国後に白馬会風の自然主義から離れ、色彩を絞って対象を平面的に描く、簡潔な画面構成を追求していった。本作でも、中国服のピンクと背景のグリーンの対比などにその姿勢がうかがえる。さらに、本作には匂いを象徴するモチーフが点在している。机上の小瓶は、清朝の宮廷でたしなまれた嗅ぎ煙草の容器「鼻煙壺(びえんこ)」だろう。その左の花瓶には、カーネーションらしき花が生けられている。ここでは目に見えない匂いという感覚を絵画で表すことも試みられている。

③

萬鉄五郎《太陽の麦畑》1913年 油彩・板 東京国立近代美術館蔵



萬鉄五郎(1885～1927)は岩手県花巻市に生まれる。東京美術学校で黒田清輝の指導を受ける。1912年(明治45)に岸田劉生らとヒュウザン会(フェウザン会)を結成。同会解散後に一時帰郷すると、キュビズム風の形態の探求に進んだ。

萬やその周辺の画家は、しばしば太陽をモチーフとした。なかでも本作の太陽は、空や家屋を覆うほどの強い光線の表現によって、鮮烈な印象を与える。点描のようなタッチからもフィンセント・ファン・ゴッホに感化されたことは明らかだが、特に文芸雑誌『白樺』で「落日」として紹介された、ゴッホの《サント・マリー・ドラ・メールの眺め》(オスカー・ラインハルト美術館蔵)を参照したといわれる。同誌では、太陽はゴッホにとって力強さの象徴だったと述べる文章が掲載されていた(*)。萬にとっての太陽は、内面から湧き起こる強い表現意欲を託すものだったと言えるだろう。

*柳宗悦「革命の画家」『白樺』3巻1号, 1912年1月。

□ **主な出品作品** (広報画像をご希望の方は広報担当に番号をお知らせください)

④

**岸田劉生《麗子肖像(麗子五歳之像)》1918年 油彩・キャンバス
東京国立近代美術館蔵**



岸田劉生(1891~1929)は東京都中央区に生まれる。黒田清輝の指導する白馬会葵橋洋画研究所に学んだ。1911年(明治44)に雑誌『白樺』と出会ってフィンセント・ファン・ゴッホらポスト印象派に心酔し、12年にヒュウザン会を結成。まもなくアルブレヒト・デューラーら北方ルネサンスの絵画に関心を移し、15年(大正4)に草土社を結成した。

本作は、劉生が娘の麗子をモデルに描いた数多の作品のうち、最初の油絵。麗子はイヌタデ(赤まんま)を手に、藍色の浴衣を着た姿である。一見するとタイトルどおり麗子の肖像のようだが、だまし絵のように上部にアーチ状の額が描かれているために、肖像画を描いた絵画のようにも見え、鑑者の認識を攪乱させる。しかし、細密な写実描写や明暗表現が施された麗子は、絵画平面に止まらない立体感と実在感をたたえている。この頃自らを「神秘的写実派」と称した劉生は、写実の追求によって、目に見える形の奥にある時間を超えた美の表現を目指していた。

⑤

**藤川勇造《詩人M》1925年 ブロンズ 東京国立近代美術館蔵
撮影：大谷一郎**



藤川勇造(1883~1935)は香川県高松市で漆工芸を家業とする家に生まれる。香川県立工芸学校(現・香川県立高松工芸高校)を経て、東京美術学校彫刻科を卒業した1908年(明治41)、フランスに留学。12年頃にオーギュスト・ロダンに抜擢され、数年間アトリエで助手を務めた。16年(大正5)に帰国し、19年に二科会彫塑部の創立会員となった。

本作のモデルは、藤川の義理の兄であり詩人の三好十郎。目を伏せてうつむいた姿は、思索に沈んでいくかのようなのである。師のロダンにも《パンセ》(1895年頃)という女性が物思いにふける頭像がある。本作は同作を着想源に、芸術のインスピレーションを得ようとする男性像へ置き換えたと思われる、本作の関心が人間の内面性にあることを示している。

⑥

古賀春江《海》1929年 油彩・キャンバス 東京国立近代美術館蔵



古賀春江(1895~1933)は福岡県久留米市の寺に生まれる。本名亀雄(よしお)。太平洋画会研究所などで水彩を学んだのち、油彩画を始める。二科会を舞台に活動し、1922年(大正11)には神原泰ら新進作家と大正期新興美術の中心的グループ「アクション」を結成。キュビズム風やクレール風、シュルレアリスム風など多様な西洋美術の動向を取り入れ、詩的な抒情性と知的な構成の間を揺れ動きつつ制作した。

本作は発表当時「超現実主義絵画」と評された。現実の時空間を超えて組み合わせられたモチーフは、雑誌や絵はがきからイメージを引用したものだ。水着のモダンガールと工場、潜水艦と帆船、飛行船と魚は、形としては似通いながらも、対比的な位置づけにある。古賀の目指す超現実主義では、意識的な構成によって、対象の現実的な価値を消滅させる必要があると考えられた。本作では近代文明を象徴するモチーフを対立させることによって、よりよい現実、すなわち超現実を目指そうとしたのだろう。

□ **主な出品作品** (広報画像をご希望の方は広報担当に番号をお知らせください)

⑦

**ピエール=オーギュスト・ルノワール《胸に花を飾る少女》1900年頃
油彩・キャンバス 熊本県立美術館蔵**



ピエール=オーギュスト・ルノワール(1841~1919)はフランス、リモージュに生まれる。シャルル・グレルの画塾で後の印象派の画家クロード・モネらと出会った。1860年代末から外光表現に関心を寄せ、74年から印象派展に出品。80年代には印象派の画風を離れ、堅固な形態をもつ古典的な表現を模索したが、90年代には柔らかな筆触と明るい色彩表現へ回帰した。

本作は90年代以降の作品に典型的な、血色のよい肌の女性像。モデルは妻アリーヌの従妹ガブリエル・ルナルと伝えられる。ルノワール家で次男ジャンの子守りを務めた彼女は、しばしば画家の家族像にも登場し、ルノワールらしい幸福な感情に満ちた作品に貢献した。この頃から持病のリウマチが悪化したルノワールは、南仏カーニュへと段階的に移住する。この南仏の自宅には梅原龍三郎をはじめとする日本人画家が訪れ、日本に持ち帰られた作品によって直接的に、あるいは、雑誌等の図版を通して間接的に、日本へルノワールの画風を伝えていった。

⑧

**アンリ・ルソー《第22回アンデパンダン展に参加するよう芸術家達を導く自由の女神》1905-06年
油彩・キャンバス 東京国立近代美術館蔵**



アンリ・ルソー(1844~1910)はフランス、ラヴァルに生まれる。兵役に服した後、1871年パリ市の入市税関吏となる。この頃より独学で絵を描き始め、93年税関退職後は絵画制作に専念する。

本作では、空を飛ぶ自由の女神がラッパを吹きならし、多くの画家たちが作品を運び込むアンデパンダン展の会場を指さしている。無鑑査の展覧会であるアンデパンダン展は、誰でも作品を出品することができるため、正規の美術教育を受けていないルソーにとって貴重な作品発表の場であった。本作も1906年3月の同展に出品された作品で、手前で握手を交わすのは、アンデパンダン展会長(左)とルソー(右)だ。中央のライオンの足元にあるプレートにはアンデパンダン展の主要会員の名前が記されている。

⑨

**パウル・クレー《花ひらく木をめぐる抽象》1925年
油彩・厚紙 東京国立近代美術館蔵**



パウル・クレー(1879~1940)はスイス、ミュンヘンブフゼーに生まれる。ベルンの高等学校で学んだ後、ミュンヘンに渡り1900年からミュンヘン美術アカデミーでフランツ・フォン・シュトゥックに学ぶ。12年ワシリー・カンディンスキーらが結成した「青騎士」展に出品し、彼らと親交を深めた。14年チュニジアを旅行した際に、色彩表現に目覚める。20年ヴァイマルのバウハウスに招かれ、31年に契約を解消するまで教鞭をとった。この期間に、クレーの絵画表現についての方法論はより一層理論的に整理されていく。

本作はその時期に描かれたもので、彼が模索していた造型と色彩の理論が実践されている。画面上に色とりどりの矩形が緊密に組み合わせられており、中央に近づくにつれ、矩形は細かく、色調は明るく、色彩は鮮やかに、軽妙な諧調で変化し、タイトルの「花ひらく木」を想起させる生命感あふれる印象を見る者に与える。

□ **主な出品作品** (広報画像をご希望の方は広報担当に番号をお知らせください)

⑩

ワシリー・カンディンスキー《全体》1940年
油彩・キャンバス 東京国立近代美術館蔵



ワシリー・カンディンスキー (1866~1944)は帝政ロシア、モスクワに生まれる。1896年モスクワで開催されたフランス印象派展でクロード・モネの作品に感銘を受け、大学講師の職を辞し画家を志す。1900年ミュンヘン美術アカデミーに入学。ミュンヘン分離派のフランツ・フォン・シュトゥックに師事。翌年には前衛芸術家グループ「ファールクス」の結成をはじめ、以後幾つものグループ設立に関わる。11年アーノルト・シェーンベルクのコンサートに着想を得たことを機に作品群「印象」を制作し、画業における大きな転機を迎えた。22年からナチスにより建物が封鎖される33年まで、ドイツの総合造形学校バウハウスで教鞭を執った後、パリへ亡命する。

本作にも登場するアメーバか胚のような生命体のようなモチーフは、カンディンスキー最晩年の作品に繰り返し現れた。ナチスのフランス侵攻に前後する困難な時代において、小さな命を見つめながら大きく広がる宇宙に想いを馳せていたのかもしれない。

⑪

石垣栄太郎《腕》1929年 油彩・キャンバス 東京国立近代美術館蔵



石垣栄太郎(1893~1958)は和歌山県太地町に生まれる。1909年(明治42)に渡米。血洗いや掃除夫などの職を転々とするなか、社会主義者・片山潜と親交を結ぶ。15年(大正4)にアート・スチューデントズ・リーグに通い、都市生活をありのままに描いたジョン・スローンに学んだ。20年代末からメキシコ壁画運動を推進したディエゴ・リベラと交流しつつ、経済的苦境や人種迫害といった社会問題を取り上げた。

石垣は本作について「生産の腕を、解放の腕を出来るだけ強く闘争的に、ポストリアリズムの手法で描かんとした」と語っている。筋肉質な腕と重厚なハンマーは形が単純化され、大胆なトリミングによって強調されている。ハンマーは23年以降ソビエト連邦の国旗に採用された、労働者の象徴だった。本作はアメリカの第13回独立美術家協会展に原題「Undeafated Arm(必勝の腕)」として発表され、左翼雑誌『New Masses』5巻2号の表紙となった。

⑫

三岸好太郎《雲の上を飛ぶ蝶》1934年
油彩・キャンバス 東京国立近代美術館蔵



三岸好太郎(1903~34)は北海道札幌市に生まれる。中学卒業後の1921年(大正10)に画家を目指して上京。職を転々としつつ独学し、23年に在野の洋画団体のひとつ春陽会で入選を果たした。30年(昭和5)には独立美術協会の結成に参加。素朴派風、フォーヴィスム風、ひっかけ技法による制作などの作風の転換を経て、蝶と貝殻をモチーフにした幻想的な連作を発表した。

雲の上を群れ飛ぶのは、ヤマユガ、メンガタスズメ、アオスジアゲハなど30匹余りの蝶や蛾。標本のように翅を広げた蝶の姿は、図鑑から引用したとみられる。実際に蝶が雲の上を飛ぶことは不可能と考えられるが、科学と空想が混在した情景だからこそ、本作はいっそう幻想性を帯びている。詩作も行った三岸は、本作を含む絵画連作を「視覚詩」と呼んだ。

□ **主な出品作品** (広報画像をご希望の方は広報担当に番号をお知らせください)

⑬

小磯良平《練習場の踊子達》1938年
油彩・キャンバス 東京国立近代美術館蔵

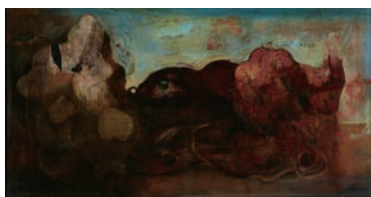


小磯良平(1903~88)は兵庫県神戸市に生まれる。1926年(大正15)、東京美術学校西洋画科在学中に帝国美術院展覧会で特選を得る。27年同校を首席卒業し、翌年から約2年間ヨーロッパ文化を見聞した。36年に猪熊弦一郎らと新制作派協会を組織。洗練された女性像で知られる一方、38年以降、優れた描写力と構図力をもって戦争画を描いた。

小磯は34年からバレリーナを画題としたが、群像としては初期の作品。登場人物の大半は頭部の高さが揃えられているのに対し、人物の脚や光を反射する衣装の位置に差をつけることで、巧みに遠近感が描き出される。第2回新制作派協会展に出品された際のタイトルは《憩ふ踊り子達》。人物たちは身づくろいなど思い思いのしぐさを見せつつも、劇的なほど明暗が対比された室内のなかで、硬質な緊迫感を漂わせる。

⑭

鬨光《眼のある風景》1938年 油彩・キャンバス 東京国立近代美術館蔵



鬨光(1907~46)は広島県北広島町に生まれる。本名石村日郎(にちろう)。1924年(大正13)の上京後から二科展や独立美術協会展などの展覧会に出品し始める。31年(昭和6)には池袋モンパルナスと呼ばれるアトリエ村に転居し、画家や詩人らと交流した。39年にシュルレアリスム系の美術文化協会の結成に参加。43年には戦時下での自由な発表の場を求めて新人画会を組織したが、44年に召集を受け、46年に上海で戦病死した。

遠くに水平線を望む大地に置かれた、肉塊のような「何か」。塊やその周囲に絵具を塗ったり削ったりした跡が残っており、試行錯誤の末、最終段階で眼が描き入れられたことがわかっている。絵画に時局に沿った意味内容が求められつつあった日中戦争下において、形を変えつつあるかにも見える塊は、何らかの意味付けがなされることを拒んでいる。それを示すように、鬨光が本作に付けたタイトルは単に「風景」だった。

⑮

松本峻介《Y市の橋》1943年 油彩・キャンバス 東京国立近代美術館蔵



松本峻介(1912~48)は東京都渋谷区に生まれる。二科展に出品し、前衛系の画家たちによるグループ・九室会に加わった。1943年(昭和18)には鬨光らと新人画会を結成し、戦時下に小さいながら自由な作品発表ができる場を組織した。また、妻・禎子とエッセイとデッサンの雑誌『雑記帳』を発行し、同誌を中心に青年画家の立場から批評的な芸術論を発表した。

本作で描かれるのは、横浜駅近くを流れる新田間川(あらたまがわ)に月見橋が架かる風景。橋、跨線橋(こせんきょう)、工場などの建造物が生む形を反復させて、構図を作っている。透明感のある青い画面は、薄く解いた絵具を何度も重ねることで生まれたもの。本作をはじめとして、松本は戦中期に繰り返し街の風景を描いた。戦時下という困難な状況に翻弄されないよう、自らの周辺を見つめ、画家としての態度を確かめようとしていたのかもしれない。

□ **主な出品作品** (広報画像をご希望の方は広報担当に番号をお知らせください)

⑯

藤田嗣治《猫》1940年 油彩・キャンバス 東京国立近代美術館蔵

藤田嗣治(1886~1968)は東京都新宿区に生まれる。東京美術学校卒業後の1913年(大正2)にフランスに渡る。20年代には乳白色の肌の裸婦が絶賛され、エコール・ド・パリの寵児となった。33年(昭和8)以降は日本を拠点とし、日中戦争開戦後は戦争画制作に没頭。戦後は戦争協力の責任を問われて日本を離れ、55年にフランス国籍を取得した。

1933年以後日本で暮らした藤田は、日中戦争開戦後の39年にパリに戻る。本作はその頃、ナチスによるパリ侵攻が迫る中で描かれた。14匹の猫がうなり声をあげ、飛び掛かり、あるいは逃れようとしながら争うダイナミックな姿を、緻密な線描によって描く。猫たちはそれぞれに争っているように見えるが、渦を巻くような構図にまとめ上げられている。結果的に渡仏して1年で再び日本に戻ることとなった藤田は、帰国後、本作を第27回二科展に《争闘》のタイトルで出品した。



※本作の画像提供はできません。

⑰

藤田嗣治《アッツ島玉砕》1943年

油彩・キャンバス 東京国立近代美術館蔵(アメリカ合衆国より永久貸与)

1943年(昭和18)5月29日、アリューシャン列島アッツ島でのアメリカ軍との戦闘で、日本の守備隊が全滅した出来事を描いたもの。絵画以外では表現しえない凄絶な「玉砕」の光景は、藤田の長い滞欧経験によって培われた、ルネサンス以降の歴史画の知識に裏付けされている。本作は同年の国民総力決戦美術展に出品され、敗戦図にも関わらず人々の感涙と奮起を呼んだ。ヨーロッパから主に印象派以後の絵画を受容し、私的なテーマに造形的なアレンジを加えて描くことが主流であった日本において、戦争画制作は画家が優れた技量をもって国家の需要に応え、社会とつながる機会でもあった。



※本作の画像提供はできません。

⑱

北脇昇《クオ・ヴァディス》1949年

油彩・キャンバス 東京国立近代美術館蔵

北脇昇(1901~51)は愛知県名古屋市に生まれる。鹿子木孟郎や津田青楓の画塾に学び、1932年(昭和7)二科展に初入選。37年頃からシュルレアリスムの影響を示す。39年美術文化協会の結成に参加。身近なものを別の何かに見立てる手法で異世界を表現した。

本作は、49年第9回美術文化協会展に出品された。ラテン語で「何処へ行く」という意のタイトルは、死に赴くキリストにペテロが問いかけた言葉であるが、北脇はポーランドの小説家ヘンリク・シェンキエヴィッチによる同名小説を着想源とした。画面中央に立ち尽くす復員兵の周囲には、三つの選択肢が示されている。右の嵐か、左の赤旗のデモ隊か、あるいは、足元のカタツムリの殻のように殻に閉じこもりその場に留まるのか。戦後の画家の苦悩とともに、新たな一歩をいかに踏み出すのかを問いかけている。



□ **主な出品作品** (広報画像をご希望の方は広報担当に番号をお知らせください)

①9

岡本太郎《夜明け》1948年 油彩・キャンバス 東京国立近代美術館蔵

岡本太郎(1911~96)は神奈川県川崎市に生まれる。1929年(昭和4)東京美術学校西洋画科に入学するが、同年に一家で渡欧。単身でパリに逗留し、美学や民俗学を学ぶ。帰国後、48年に花田清輝らと「夜の会」を結成。縄文土器に美を発見した『日本の伝統』の刊行や、万国博覧会(大阪)に《太陽の塔》を制作するなど、「多面体」的な活動を展開した。

本作は第33回二科展の出品作品である。暗闇と夜明けの光、人と怪物、男性と女性といった対極に位置する題材が、黒と白、青と黄など、コントラスト豊かに表現されている。本作を制作した直後、自らの芸術理念として「対極主義」を提起した岡本は、抽象絵画とシュルレアリスムなど、対立する二つの要素を「矛盾のまま対置」させ、創造のエネルギーに結びつけるという考えを主張した。



※本作の画像提供はできません。

本プレスリリースについてのお問合せ先

高松市美術館 Tel: 087-823-1711、087-823-1730 〒760-0027 香川県高松市紺屋町10-4

展覧会担当: 牧野裕二 yuji_6348@city.takamatsu.lg.jp

高見翔子 shoko_11801@city.takamatsu.lg.jp

広報担当: 福田千恵 a160159@city.takamatsu.lg.jp